北海道の国際協力情報紙

であい

vol.83 2018 SPRING

公益社団法人
北海道国際交流・協力総合センター
HIECC/ハイエック
Hokkaido International Exchange and Cooperation Center

平成29年度「高校生・世界の架け橋養成事業」報告会

ハイエックでは、将来を担う北海道内の高校生を対象に、世界規模の課題等に目を向け、国際感覚をもったグローバル人材の育成を目的とし「高校生・世界の架け橋養成事業」という枠組みで3つの事業を実施。3月18日(日)にJICA札幌(札幌市白石区)で行われた道民向け報告会で、事業に参加した高校生が現地での経験などを発表した。

トップバッターは、昨年の4月にロシア連邦ヤマロ-ネネツ自治管区で開催された「ユース・エコ・フォーラム2017」に参加した高校生2名。このフォーラムでは、北方圏地域の国々から参加した高校生が北方圏地域における環境問題などについて考え共通認識を持つことを目的として実施されている。今年は「北方圏私たちのホーム」というテーマのもと、ロシアと日本(2か国5地域)の高校生が参加。各地域が抱える環境問題などについて発表を行った。他に文化交流やヤマロ-ネネツ自治管区に住む先住民族の村を訪問するなど貴重な体験をしてきた。

次に発表したのは、昨年11月に韓国・済州島で行われた「済州・国際青少年フォーラム2017」に参加した高校生4名。このフォーラムの最大の特徴は参加者全員が英語で世界的な時事テーマについて話し合うディスカッション。今年は「よりよい未来を目指して-グローバルシチズンの役割」というメインテーマのもと、移民労働者やごみ問題、社会の不平等や人権などについて、カナダ、アメリカ、モンゴル、ブータンなど8か国24地域から参加した高校生150名が活発な意見交換を行った。英語で自分の意見を言うことに苦労することもあったが、フォーラムの参加者同士が支え合い乗り越えたことは、忘れられない思い出となっていたよう。

最後は、昨年8月にラオスへのスタディツアーに参加した高校生10名による発表。現地で活動するNGOが支援している中学校や図書館を訪問し、またベトナム戦争の影響でラオスに多く残された不発弾の処理活動の支援をしている方から直接お話を聞く機会もあった。ツアーの前にラオスについて事前学習をしていたが、やはり自らがその場所で感じるインパクトは計り知れなかった。

当日は、一般市民や各高校の関係者や発表者の保護者などを含め60名以上が来場。高校生が飾らない言葉で語る一つ一つの報告が、来場者の感心や大きな感動を呼んでいた。

済州島でのフォーラムに参加しての感想を伝える高校生4名

誰もが活躍できる職場と地域をめざして　～ダイバーシティが拓く地域の未来～

(2月28日(水)　サンリフレ函館視聴覚室　函館市)

ダイバーシティとはもともと「多様性」などの意味を持つ英語だが、労働における「人材の多様さ」の概念などとして用いられることがあり、最近では日本の企業経営でもこの考え方を取り入れる傾向が見られる。講師に(一財)ダイバーシティ研究所代表理事の田村太郎氏と、低価格で良質なウィッグ生産を通してがん患者支援をする株式会社PEER(ピア)代表取締役社長の佐藤真琴氏を迎え、「ダイバーシティ」をキーワードに函館の今後の可能性を参加者と考える講演会が行われた。

田村氏からは、具体的な数字やグラフをもとに、人口構成の変化やAI(人工知能)・ロボット技術の発展がもたらす日本を覆う2つの脅威についての話が。特に介護・建設分野はすでに人手不足に直面し、大学などの高等教育機関への進学率の低下は必至とみられ、脅威がすでに差し迫っていると具体的な例を紹介。講演後半では、前段で紹介した脅威を覆す「ダイバーシティ社会モデル」を目指し、日本全国の例を複数紹介しながら、函館の未来を拓くための提言があった。

田村氏の講演に続いて、多様な働き方を実践的に取り組んでいる佐藤氏からの事例紹介。「誰もが排除されない社会づくり」という社会課題は、ともすれば民間の役割ではないと捉えられるかもしれないが、佐藤氏は一般企業が事業化することができると言う。今や高齢化社会を迎え、医療が発展してきた日本にとってがん患者は少数ではなく、闘病しながら働き手となる人はますます増加。そういう人も社会で生き生きと活躍できるよう、事業を通して「サードプレイス(個人としてくつろぐことができる第三の居場所)」を提供し、ビジネスとして成長できる可能性を示していた。

講演後のトークセッションで参加者からは、「(田村氏の講演で)人口が減っている地域は災害に弱いという観点は大きな衝撃であり、函館の未来を考える際に参考となる観点だった」、「事業を地域とつなげる必要があるか」など感想や質問があり、田村氏と佐藤氏が全国の事例を紹介しながら具体的に回答し、双方向で活発な意見交換がなされ終了となった。

平日の夜にも関わらず熱心に講演を聞く参加者

平成 29 年度北海道外国訪問団
ブラジル青年交流団受入事業
（1 月 30 日～2 月 6 日　受入）

「北海道外国訪問団受入事業」は、本道からの南米への移住者子弟を北海道に迎え、「父祖の地・北海道」について認識を深めるとともに、道内の関係者との交流を通じて相互理解を促進し、北海道と移住国との親善交流に寄与することを目的に実施。平成２９年度で２２回目の開催となり、この度３年ぶりにブラジル連邦共和国からの青年を受入れて実施した。

最も暑さの厳しい時期のブラジルから北海道に来た６名（中野ガブリエル寿則団長、ほか５名）。現地とおよそ 30 度以上の気温差があり、さらに来道したときが北海道の厳寒期。しかし、幸運なことに訪問団の滞在期間中は寒いながらも晴天に恵まれ、北海道の真冬の厳しさと美しさの両方を存分に満喫していた。

プログラムには、北海道の産業や歴史、自然や文化などの体験が盛り込まれ、特に団員の反応が一番大きかったのが札幌ドーム見学。野球モードからサッカーモードへの「場面転換作業」の動画を鑑賞すると、最先端の技術に一同大興奮。また、八紘学園北海道農業専門学校では、「インスタ映え」を意識した「スノーキャンドル」作りを学校側で企画。訪問団員も雪遊び感覚でキャンドル制作を手伝った。日が暮れた頃に行われた点灯式で、中野団長がメインのキャンドルに灯をともし、白樺並木が幻想的な光に包まれた。

滞在７日目には全員が最も楽しみにしていた「さっぽろ雪まつり」へ。芸術的な大雪像に圧倒され、寒さを忘れ何枚も写真を撮影。世界中の旅行者を魅了するイベントを通し、真冬の厳しさだけではなく、白銀の世界ならではの美しさを感じていた。他にも、親戚及び友人・知人宅でのホームステイでは真心からの歓迎を受けて、道産子の温かさや優しさに触れる貴重な時間を過ごしていた。

来年は北海道民がブラジルへ移住して 100 周年の佳節を迎える。記念すべき年を前に、今回の訪問団６名がブラジルと北海道の友好と絆をさらに深めた意味は大きく、この交流が両国の関係をさらに発展させていくのだろう。

札幌ドーム展望台にて
ガラス越しの青空に緑のブラジル国旗がよく映える

平成 29 年度
北海道出身海外移住者子弟留学生
北海道海外技術研修員　修了式

3 月 19 日（月）ホテルポールスター札幌（札幌市中央区）

写真左　葛西　拓紀さん　アルゼンチン共和国
（吉田学園情報ビジネス専門学校にて「ゲーム開発」を研修）
写真中　隠岐　エリカさん　ブラジル連邦共和国
（天使大学看護栄養学部にて「食品栄養科学」を研修）
写真右　高橋　奈津美さん　パラグアイ共和国
（北海商科大学にて「消費者に対しての日本的アプローチ」を研修）

平成 29 年度ハイエック受入の北海道海外移住者子弟留学生（以下、留学生）は 4 月に、北海道海外技術研修員（以下、研修員）は 6 月に来道し、それぞれの専門の勉強をスタート。3 月 19 日に札幌市内のホテルで行われた修了式で、留学生は 1 年間、研修員は 10 か月間の全てのプログラムを終えた。

来道当初は日本語での大学生活や専門分野の研究に少なからず不安を覚えていた三人。各自専門分野の知識はあったとしても、母国語で学んだため、見慣れない漢字に一瞬怯むことも。しかし、それぞれの学校や研修先で出会った先生や学生たちが、懸命に学ぶ三人を優しく支えてくれた。数か月を必死に過ごし、気付けば少しずつ自信をつけていった。大学でのゼミで積極的に発言したり、在校生の前でブラジルの栄養事情について日本語で 90 分の講義をしたり、学内のゲーム制作コンテストで上位に入賞するなど、徐々に本来の力を発揮。大なり小なり壁にぶつかりながらも、時には涙を流し仲間同士で支え合い、それぞれ大きな成果を残すことができた。修了パーティーでの三人によるスピーチが、今までの労苦と成功を物語っていた。

緊張の面持ちで関係者に感謝の気持ちをスピーチで伝える

修了式には留学生と研修員に親身になって指導してくださった受入機関の方々、北海道総合政策部国際局の工藤国際課長、南米圏交流団を代表して（一社）北海道日伯協会の道下会長や北海道パラグアイ協会の堀内会長、また来道当初に日本語の指導を担われた日本語講師の方々、またハイエックから越前副会長兼専務理事はじめ職員が出席し、晴れの日を迎えた三人を温かく見守った。全ての不安を乗り越え、北海道での留学と研修を終えた留学生たち。帰国後の夢や目標に向かって進む節目の日を無事に終え、三人の表情は最高に輝いていた。